

（神戸新聞）

食品・公害セミナーなど人気

主婦らに反響呼ぶ

すっかり定着、利用ふえる

神戸学生・青年センター

学生、青年を中心に広く市民一般に集客の場を提供し、現代社会の問題点や人間の生き方について話し合う場として二年前、新しく生まれ変わった神戸市灘区山田町三、財団法人、神戸学生・青年センター（小池信昭理事長）は、今でものほろ有喜食品に関心を持つ主

婦の間に静かなブームを呼んでいる。

同センターの前身は日本キリスト教団兵庫教区神戸学生センターで四十二年に発足、人間と宗教の問題、大学問題などについて多彩なセミナーを開設していたが四十六年、それまでの木造の建物を鉄筋に建て替え、四十七年一月、より広い市民にアピールするよう、と財団法人に切り替えた。

以後、小林純岡山大教授らを招いての「公害セミナー」、朝鮮史研究家の羅善慶さんらを招いての「朝鮮史セミナー」、藤原邦彦京都市衛生研究所員、中岡哲郎神戸外大講師、神戸生括科学センターの岡原哲らの「婦人生活講座」など幅広いセミナーを定期的に開設、その都度、神戸、阪神間の学生、サラリーマン、主婦ら數十人が参加、反響を呼んでいる。

とくに昨年春から開設している食品・公害セミナーでは保田茂神戸大農学部助手らが現在の農産物生産物がいかに農薬などに汚染され

ているかを話し、三木市で養鶏業を営んでいる原野太郎さんが抗生物質、ホルモン剤などを含んだ飼料を与えて生まれたタマゴの危険な状態について講演、安全なタマゴの生産を訴えた。この講演の際原さんが自然飼料を与えた「自然タマゴ」を持参、参加者に配されたところ、卵殻の硬さ、黄味の色などが市販されているタマゴと比べものにならないほどよかったことから参加者の間に共同購入の声が起こり、昨年末から月二回、一回、約一万三千個のタマゴを共同購入、宝塚、西宮、芦屋、神戸、明石の十六カ所で共同者に販売している。

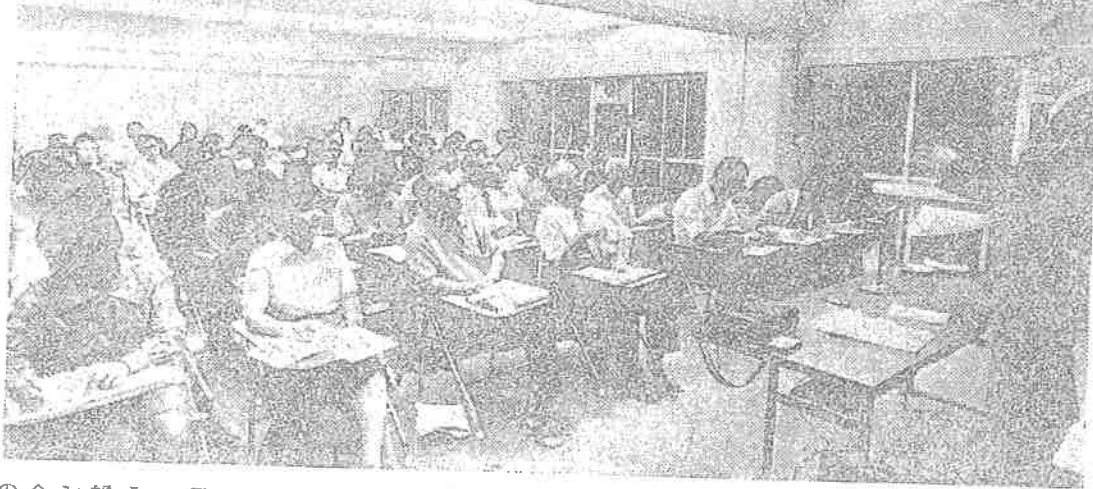
元牧師の小池信昭氏は「食品・公害セミナーが思わぬ方向に発展、驚いている。食品汚染の恐ろしさを真摯に受け止めている主婦から大きな反響があり、セミナーに出ていたたいして賛同された方に配っています」と話しており、これをきっかけにこのほど同館内に県有機農業研究会も発足した。

同館ではこれらセミナーの講演をすべて録音テープに取って保存しており、一回一カセット三百円で貸出ししており、好評。



市民にすっかり定着した神戸学生・青年センターと内内は小池館長

「朝鮮史セミナー」で熱心にメモを取る受講者たち(神戸学生・青年センターで)



学び直そう 朝鮮の歴史を

正しい理解を求めて

五期目を迎えた「セミナー」

神戸学生・青年センター

朝鮮の視点から、朝鮮とわが国の歴史的關係を正しくとらえようと、「朝鮮史セミナー」が、一年以上にわたって神戸市灘区山田町三丁目、財団法人神戸学生・青年センター(小池澤富雄理事長)で続いており、その第五期が、「朝鮮文化と日本」をテーマにこのほど始まった。「欧米開港の近代朝鮮で育ちながら現代日本人のゆがみを問い直したい」と、同センターが主催しているものだが、日韓關係の、深い直し、がいわれる中で、このユニークなセミナーの受講生は、在日朝鮮人や主婦にまで、広がっている。

「朝鮮史セミナー」が始まったのは四十七年六月。以後、ひと月に二回程度の割合で講師を呼び、四

六回を一期として「古代における朝鮮と日本」「現代朝鮮と日本」などのテーマを決めて、ほとんども断続なく続けられてきた。講師は評論家鄭敏漢氏、奈良女子大

学教授中塚明氏ら一流ぞろい。約一時間半の講演のあと質疑応答で行動に結びつきにくいセミナーの弱点を補うため朝鮮人問題を取り組んでいるグループのアピールを聞くという形で進められている。

受講者は、初めのごときは三十人程度で、それもほとんどが学生だったが、今では約七十人に増え、在日朝鮮人、一般社会人、主婦らが大部分を占めている。同センターでは「高松塚古墳の発見、金大中事件もそれに続く日韓關係の緊迫を、日本と朝鮮の關係

を見直したいとの機運を生んだのでは」といっている。

受講の動機について大阪に住む朝鮮人青年は「祖國の正しい歴史を知りたい」。二十歳の〇〇は「日本人の朝鮮人虐待は、学校で教えてくれなかった。現在の反日運動の底にあるものを知りたい」と思いました。青森市の六十一

歳の主婦は「朝鮮人の差別問題に関心があった」。古美術の勉強をしているのですが、朝鮮史とは切り離せない」といって六十八歳の男性も、講師からも「他に類のないものだから、地味でも続けたい」との声があがっている。小池館長は「朝鮮史は、戦前は日本史の中に組み込まれていた。戦後の学校教育でもほとんど顧みられていない。私たち一人一人が対朝鮮關係で正しい位置づけをし、現在の日韓關係を正しくとら

えるためにも、もっと続けていきたい」と話している。

第五期の第二回以後の予定は次の通り。(敬称略)

十月二十六日「朝鮮の陶磁器と日本」(評論家・鄭敏漢)▽十一月十六日「朝鮮の倫理思想と日本」(大阪市立大学講師・姜在

彦)▽十一月十四日「朝鮮近代文学と日本」(詩人・金時鏡)。いずれも午後七時九時で、受講料は各回三百円。これまでの講義を録音したカセットテープも、一週間以内三百円で貸し出ししている。問い合わせはTEL078-112760同センターへ。

神戸学生・青年センター 4月17日 10周年記念式典 「今、宣教の使命新たに。」

【関西支社発】米国長老教会から、学生伝道のために使用されていた建物の移譲を受け、学生、青年のために教育機関としてその活動の場を提供している神戸学生・青年センター(河上民雄理事長、

辻通館長、神戸市灘区山田町三ノ一)の十周年記念式典が、四月十七日午後一時から関係者約四十人が出席して行われた。また、この日、加藤周一氏が「日本文化の課題」と題して記念講演、二百人以上の人たちが、同氏の講演に熱心に耳を傾けた。

記念式典で、理事の中嶋正昭氏(日キ教団総幹事)が、「センターは宣教の最前線に在る。新しい十年に向かって課せられている宣教の使命を新たにする時であると思ふ」と祝辞を述べ、理事長の河上民雄氏(衆議院議員)は、センターの役割として、①現代社会の課題に実践的に取り組むの地域に奉仕する、②隣り人、アジアの人たちとの交わりの場となる、などをあげ、「小池信(初代館長)、辻建の二人の館長の努力で、支援に応えることができたことを秘かに感謝している。二十周年、三十周年へと今後も変わらぬい支援を頂きたい」と挨拶した。

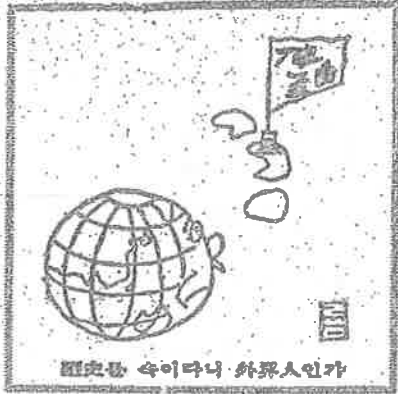
また、理事の西原基一郎氏(日キ教団常務員)が、「一九七五年から朝鮮語入門講座・朝鮮史セミナーを行い、総回数百四回、四十五人が受講している。七三年六月から九年、食品公書セミナーを始め、この七日に百回目を迎える。六十人前後。とくに、相互に公書のない食品を購入して分けあっている。近代日本とキリスト教セミナーは四十三回。今年から新たに「近代日本の精神」として始まる。十年の節目に立って、大きな飛躍をしなければ、と関係者は心を新たにしている」と報告した。

このあと、鈴木昭吾(日キ教団兵庫教区教会議長、前島宗甫(関西キリスト教都市車業問題協議会)会長)氏が祝辞を述べた。



あいさつする神戸学生・青年センター理事長の河上民雄氏(4月17日、同センター10周年記念式典で)

朝鮮通信



歴史をだますとは宇宙人が
朝鮮日報 1982.8.1

現地に見る「教科書問題」

朝鮮語を学ぶ市民が資料集出版

文部省検定歴史教科書の記述問題を、その国の新聞はどう書いているかをまとめた貴重な資料集が、朝鮮語を学ぶ市民の手で作られ、出版された。

「教科書検定を朝鮮」(神戸学生・青年センター出版部刊、八百円)。同センター(河上良

雄理事長)はキリスト教系の団体で「朝鮮(人)に対する偏見をなくすこと」を目標に、朝鮮史セミナーや朝鮮語講座をついでいる。朝鮮語講座で学ぶ人の中には、韓国の新聞を読む機会がある人も多く、この夏、韓国各紙上で展開された大キヤ

ンペーンの内容を、朝鮮語を知らない日本人にも伝えたいと考えるようになった。

翻訳にあたったのは上級クラス

の十五人で、会社員、教師、主婦など、三十代の人を中心とした。韓国の有力紙「朝鮮日報」と「東亜日報」の二紙を分担して翻訳。「一般報道」「社説」「読者の投稿」「知識人の発言」「声明」「歪曲部分の分析・反論」

「その差行・その真相(日本支配下の国家の体験談)」の七部門に分類してまとめた。さらに「コバウおじさん」や「ナデロ先生」などのマンガも日本版をつけて転載した。

新聞は七月八日から八月十六日発行分までをカバー、スピーディーな作業をしたことを誇りがわける。約百五十ページの資料集

は第一巻に中塚明・奈良女子大教授の同センターでの講演「歴史教育における日本と朝鮮」を収め、第二巻で「韓国・朝鮮民主主義人民共和国の報道」をまとめている。朝鮮民主主義人民共和国については、日本でも出されている「朝鮮時報」からの転載で、分量は少ない。

韓国の日本批判の論調は激しく、あらゆる文章から怒りと熱気が感じられる。中でも貴重な資料とみられるのは「私が経験した「日帝侵略」を証言する」シリーズ。「三・一運動が「暴動」だと……」「恨み深い神社参拝強要」「骨身にじみた創氏改名」など千項目について、負傷したり肉親を奪われた人たちの体験が写真入りで語られ、事実の重さを伝えている。

同センターでは「一部は日本の新聞でも伝えられたが、朝鮮語の新聞を読める日本人はまだ少ないため、ぜひ社会科学の先生たちをはじめ、多くの人に読んでもらいたい」と言っている。同センター出版部は〒657神戸市灘区山田町三の二の二、電話078・8561・2760。

(毎時) 1982.10.14

23日に収穫感謝祭

神戸安全食品の青空市も

安全な食べ物で健康にと神戸市灘区山田町三、神戸学生・青年センター内の「食品公害を追放し安全な食べ物を求める会」は、二十三日午前十時から同センターで「第六回収穫感謝祭」を開く。有機野菜などの即売もあり、多くの参加を呼びかけている。

同会は生産者と提携して農薬、化学肥料を使わない安心して食べられる野菜づくりを進めており、生活の見直しと活動の紹介をかねて年一回、感謝祭を開いている。同日は「あなたはちゃんと組織質をとっていますか」と学校給食、食品添加物、合

成洗剤、農薬の研究発表の展示のほか「子どもたちの食卓」「健康と安全を守る」などのビデオ上映、有機野菜、卵、ミカン、ナタネ油、ごま油、手作りケーキ、茶、石けんなどを即売する青空市を開く。

このほか食堂では、胚芽（はいが）米のごはん、豚汁なども販売、「奥さんたちも一度、見に来て下さい」といっている。

(第3種郵便物認可)

1983年3月21日 不申

戸

강원학예발표회 1983.3.21

神戸学生青年センター(神戸市灘区山田町三)の朝鮮語

歴史 伝説を劇に

講師 先輩らも友情出演

受講生の在日韓国人の中には、手持ちの民族衣装を身に着けて登場する人もあり、

講師のメンバーが二十日、同センターで「朝鮮語講座学芸会」を開き、これまで学んできた朝鮮語を上手に操って会場を沸かせていた。

同講座は五十年、朝鮮史や朝鮮問題に関心を持つ人たちで発足、受講者も着実に増え、今年には四クラス、三十五人が学んでいる。

発表はクラスごとに朝鮮史や伝説をテーマにした五つの劇で、昨年末から猛訓練を重ねていた。全員が何らかの役をこなす楽しい雰囲気。また、元上級クラスのメンバーが作っている野球チーム「クッパーズ」も友情出演、学芸会の盛り上げに一役買った。

発表会自体が生きた勉強会になっていた。また会社を退職後に講座に参加、意心に帰って演劇に汗を流す人も。初級のメンバーは「中・上級の劇の内容もおぼろげながら分かるほどに上達した。脱落せず頑張ってきた」と中級への意欲を燃やしていた。

学んだ朝鮮語で学芸会 神戸学生青年センター



朝鮮語学習の成果を演劇で披露する受講生ら。神戸市灘区の神戸学生青年センターで

「食品公害セミナー」を十
年間も続けている神戸市灘区
山陽町三丁目、神戸青年学生
センターがこのほど、食と健
康にまつわる五回の講演内容
をまとめた「食と食と健康」
を出版した。

本に盛り込まれたのは、同
セミナーの百回記念として昨
年七月に招かれた熊本県の菊
池養生園診療所長・竹熊直孝
さんの講演「食へのものど健
康」をはじめ、昨年九月から
十二月にかけて「食と食と健
康」のテーマで行われた四回
のセミナーの各内容。

竹熊さんが「親父をどうに

健康まず食事から



は食事の偏りを増やすこと」
などと食と健康全般について
話しているのに続き、尼崎市

出版された「食と食と健康」
の医師山中榮子さんは「小児
科医よりみた子供の健康」の
巻で、現代の子の骨のもろさ

や抵抗力のなさを食文化の観
点から解説している。このほ
か、阪神医療生協小中島診療
所の石丸修医師は「食物せん
いと便秘」、青吉佐和子作
「複合汚染」でも紹介された
奈良原の医師渡瀬美津子さんが

青年学生センター

「生命の食と食」、大塚大治
香教授の丸山博さんが「現代
病と食生活」のテーマでそれ
ぞれ話しており、主体として
食と健康の関係を多角的に

分析した内容となっている。
同セミナーが始まったのは
昭和四十八年六月、年一回

のペースで現在も続いてお
り、愛読した主婦らが「食品
公害を過放し安全な食べ物を
求める会」を編成するなど、
安全食品を求める運動の原力
的な存在になっている。

渡瀬の出版は昨年四月の
今、子供に何が定かしてい
るのか」に次いで二冊目で同
センターでは今後とも関心を呼
び起こすテーマについては出
来るだけ講演録を出版し運動
の輪を広げたいとしている。

「食と食と健康」は一冊六
百円、問い合わせは同センタ
ー(078・851・276

食品公害セミナー

記録を本に

「食と食と健康」出版

百回を越す食品公害セミナー
を続けている神戸市灘区山田町
三丁目、神戸青年学生・青年セン
ターが、百回記念講演会を五
回のセミナーの記録を「食と食
と健康」と題して出版した。A
5判、西三十一号。医師がそれ

ぞれ感想や自分自身の体験や
医学的知識に基づいて、食生活
と健康の密接なつながりを説い
ている。

百回記念に招いた熊本・菊池
養生園の竹熊直孝さんは「食べ
ものど健康」をテーマに、尼崎
市の開業医山中榮子さんは「小
児科医よりみた子供の健康」、
阪神医療生協小中島診療所の石
丸修さんは「食物せんいと便
秘」、奈良原五条市の医師渡瀬
美津子さんは「生命の食と食」、
阪大薬学部名誉教授丸山博さん
は「現代病と食生活」について
話し、出席者の質問とそれに対
する答えも収録している。

食品公害セミナーは、十年前
から月一回開催が続いており、
無償講演録などを共同購入す
る「食品公害を過放し安全な食
べものを求める会」も生まれ、
神戸を中心に約二十回世帯が加
入している。一冊六百円。送料
は二百円。問い合わせは同セン
ター出版部(078・851・276
一七六〇)へ。

セミナーの内容を出版

1983年10月13日 朝日新聞

地域からのリード



13

一九八五年の暑い夏を揺るがした外国人登録法の指紋押なつ問題。学生の街、神戸・阪急六甲にある神戸学生・青年センターでも、幾多となく在日朝鮮人の人権を支援する集会や学習会が開かれた。「朝鮮問題」は日本近代史の原点。他民族侵略のきちんとした始末をつけないければ、同じ過ちが繰り返されないとともに「限らない」と同センター主宰の飛田雄一さん(三五)。

神戸学生・青年センター

飛田さんは「ベトナムに平和を神戸行動委員会」の出身。学生時代から同センターでアルバイトとして働き、五十三年正職員に、ベトナム・沖縄・朝鮮と長年、平和・民族問題に

かかわり、センター活動の「事務局長」を務めてきた。日本人が日本人の言葉で進める朝鮮の運動で



「ベトナムに平和を神戸行動委員会」の

は、センターは先駆的役割を果たしたと思っています。もちろん、北も南もありません」と言う。

実践活動となつて市民も加わり大きく広がったのが朝鮮と食品公害の問題だった。朝鮮問題をテーマとしたセミナーは既に四十七年にスタート、これまでに百四十回以上を数える。

同センターはアメリカのボロアが元で、青年、学生の交流と新しい文化の創造を図る活動の場を提供してきた。

民族差別に戦争の根

運動の中で飛田さんらが感じたのは根強い偏見だった。「今の子供にさえ時として無意識に朝鮮差別の遊びが登場する。民族の差別がある限り、侵略・戦争の起きる可能性が潜んでいる」と警告する。

一方、食品公害では「食品公害を追究し安全な食べ物を求める会」が四十八年に発足。神戸、阪神間を中心に千三百家族の会員を持ち、有機農産物の共同購入や各種勉強会などを進めている。こちら

広域

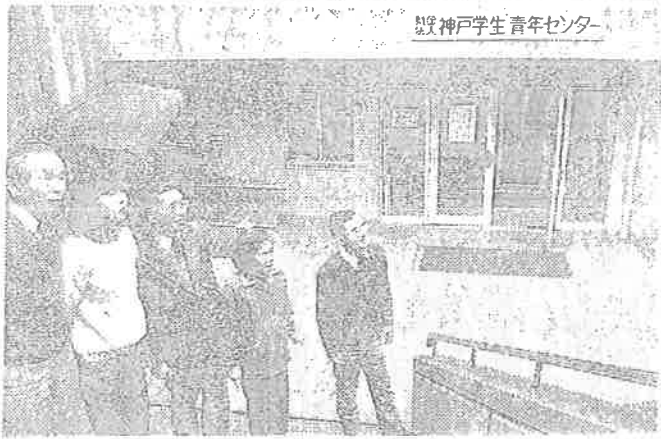
三三淡明神
木田路石戸

紙面に掲載した写真や記事のコピーなど実費提供は「神戸新聞フットサービス」へ。
問い合わせ、申し込みは電話078-6221-4121内線302

焼肉
太助亭

各種宴会
予約承ります
兵庫区三川口町
2-4-14
☎577-0770

全な食べ物を与えたい、という素朴な願いから起こった平和な生活を求める運動である。
(小村 天良記者)



神戸学生青年センター

15周年を迎えた神戸学生青年センター。さらに夢を膨らませる
辻館長(中央)ら5人の職員=神戸市灘区で



運営定着、出版も

ユニークなセミナーの開催で知られる財団法人・神戸学生青年センター(河上民雄理事長、神戸市灘区山田町三)が、この春、開館十五周年を迎える。日本基督教団を母体に生まれた施設だが、完全な独立採算で運営。さまざまな市民団体の活動と交流の場として、すっかり定着した。

神戸学生青年センター

オープンしたばかりの同施設が、その時々々の社会問題をテーマにした講演会や映画会を開いてきた。他に各種の趣味や文化教室もあり、利用団体数は年間約二千七百にも上っている。

またセミナーの成果を出版しており、五十七年に出た「今、子供になにか起って

オープンは四十七年四月。同教団兵庫教区が布教用の「神戸学生センター」として所有していた土地に、分譲マンションを建設。その一階七百八十平方メートルを新センターにして、駐車場やマンションの一部の賃料収入を柱に独立採算の態勢を築いた。

その後二年ほどの間に「食品公書」「朝鮮史」「近代日本とキリスト教」の三セミナーを次々と開設。現在も続くこれらのセミナーを中心として、その時々々の社会問題をテーマにした講演会や映画会を開いてきた。他に各種の趣味や文化教室もあり、利用団体数は年間約二千七百にも上っている。

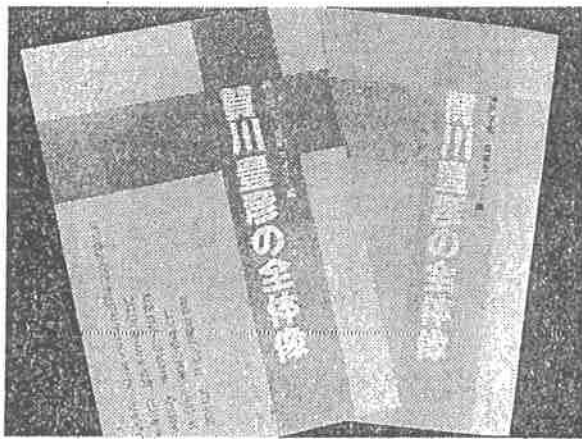
いるのか」などは、版を重ねて一万部近い「隠れたベストセラー」になった。

職員は、辻館長(左四)ら五人。五月十日に予定している十五周年記念式典やセミナーなどの記念行事の準備に追われる日々だが、同館長は「支配者が批判的な人の集まりを弾圧するとき、それは場所の破壊として現れた。自由な生の営みを願うものは、何ものからも干渉されることのない場所を獲得したいと願う」というのが、十五年前に私が書いた開館の趣旨。今後もそんなセンターであり続けたい」と話している。

「賀川豊彦像」鋭く分析

生誕百年で「全体像」出版

偉さ、限界も飾りなく



出版された「賀川豊彦の全体像」

神戸学生・青年センター(神戸市灘区山田町)がこのほど故・賀川豊彦の生誕百年を記念して主催した連続講座の内容をまとめた「賀川豊彦の全体像」を出版した。神戸に大きな足跡を残し、日本近代の巨人、大社会運動家などと評される一方で、その差別性などに厳しい批判を浴び続ける「賀川」に多方面から光を当てようとの試みで、偉大さと「限界をく」きり浮かび上がらせた内容となっている。

5学者の講演録つづる

連続講座は今年六、七月にの講演録。同センターで開かれ、賀川を、まず、山口光朗神戸女学院研究する関西の学者五人が順次講演した。「全体像」はそ

活動を繰り広げた賀川の人生を紹介しながら「非常に博識だったが、独りよがりの解釈が多かった。一面、このユニークさから新しいものの見方や発見があったのも事実」と「画面性」を指摘。続いて笠原芳光京都精華大学長は「功罪は別として近代日本屈指の巨人だった」と評した。

また、宗教思想の面から研究する内田政秀関学大教授は「賀川さんは、ものごとを非常に楽天的に見たのではないかと」と、社会進化に対する楽観がすべての底流にあったとし、佐治孝典神戸女学院大講師は社会運動の観点から光を当てた。

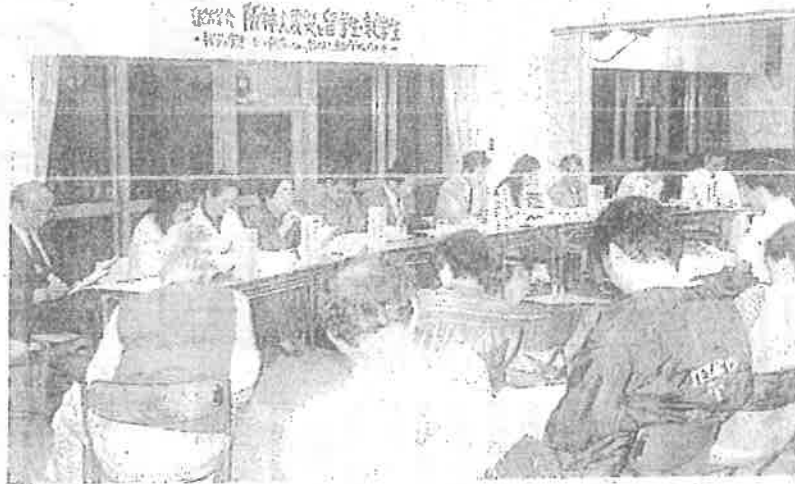
最後に土肥昭夫同志社大教授は「自分を高いところに置いて物事を考えた指導者意識

識、救済者意識は大いに開題」とした上で「(宗教者と)神との生きたかかわりの中で、自分を省みることが見失った場合、得てして安易な方向へ流れやすい。賀川といえども例外でなかった」と厳しい見方を示した。

「全体像」には、こうした学者五人の賀川論がコンパクトにまとめられており、評価の微妙な違いが興味深い内容となっている。

A5判、百八十頁。定価千四百円。地方小出版流通センター扱いで、主な書店で扱っている。

「市民と外国人学生との相互理解が必要」という声が続いて報告集会＝神戸市灘区



アジア系学生に厳しい現状

被災留学生支援で報告集会

神戸「日常的な交流の場を」

神戸新聞 1995.5.28

阪神大震災で被災した外国人学生を支援する各団体による報告集会「阪神大震災と留学生・就学生―被災の実態、そして救援のために何ができ、何ができなかったのか」が、このほど神戸市灘区の神戸学生青年センターで開かれた。

阪神大震災で被災した外国人学生を支援する各団体による報告集会「阪神大震災と留学生・就学生―被災の実態、そして救援のために何ができ、何ができなかったのか」が、このほど神戸市灘区の神戸学生青年センターで開かれた。

被災の実態、そして救援のために何ができ、何ができなかったのか」が、このほど神戸市灘区の神戸学生青年センターで開かれた。

被災の実態、そして救援のために何ができ、何ができなかったのか」が、このほど神戸市灘区の神戸学生青年センターで開かれた。

被災の実態、そして救援のために何ができ、何ができなかったのか」が、このほど神戸市灘区の神戸学生青年センターで開かれた。

ど、それぞれの活動実績が報告された。

しかし一方で、「ホームステイのあっせんでは、受け入れ先が欧米人や留学生に限定するなど、在留資格や国籍で差別されることがあり、なかなかうまくいかない」など、とくにアジア系の学生にとって厳しい現状があることが指摘された。

報告を受け、会場からは「各団体が催しなど市民と学生の交流の場をつくり、普段から相互理解を進めていく取り組みが必要」という声が続いて上がった。

震災後、国際交流団体に加え各地でさまざまな支援団体が発足。住居の確保や一時生活金の支給などで対応したが、住居を失って知人宅を転々としたり、経済的に生活相談窓口、健康

在日韓国朝鮮人

日の丸

視る目

住民

日本に住む人びとの日の丸への思いを掘り続けてきた沖縄在住の女性カメラマン石川真生さんの「日の丸を視る目」が二十六日から神戸市灘区の神戸学生青年センターで始まる。写真の中で、在日韓国朝鮮人やアイヌの人、被差別部落に住む人、右翼団体などさまざまな人が旗とともに「あなたにとって、日の丸とはなんですか」との問いに答えている。

被差別部落の

沖縄の女性
カメラマン
石川さんあすから神戸展

一九八七年の沖縄国体で日の丸を焼いた知花昌一さん全が、日の丸を押し入れに大事にしまっていたことに関心を持った。「沖縄人は日本人なのか」と悩み続け、沖縄人と沖縄に関するものしか撮影したことがなかった石川さんは「日の丸の旗を持たせて、日本の国を表現できればおもしろいのでは」と、百人を目標にさまざまな人にカメラを向けはじめた。

尼崎市で喫茶店を経営する金成日さんは、同化を強制する日本から解放されたいと「日の丸を突き破った私」を表現、旗に穴をあけ顔を出してみせた。兵庫県の被差別部落で生まれ、部落解放同盟の荊(けい)冠旗を染めた着物を着る女性は「私の日の丸は、荊冠旗」と言った。

広島で被爆し、片足を失った女性は日の丸で上半身に覆う。観光船を営む宮城県の女性は、漁港の前で旗と夫の遺影を持ち「日の丸を軍国主義の旗と

右翼

だけ見るのはおかしい」と語った。新右翼の男性は日の丸を肩にかけ、歩道橋の上から銃を撃つまね。「昭和に日の丸が赤く悪い血に染まった。一度、塗り替えないと」

国旗国歌法が成立に向けて動き出した六月、市民グループが写真展を企画。



神戸でも始まる石川真生さんの「日の丸を視る目」写真展と主催者の青木一博さん(神戸市灘区山田町三、神戸学生青年センター)

アイヌの人

八月には石川さんの目標の百人を超えた。関西では五カ所目の神戸展は、うち五十五点を二回に分けて開催する。

石川さんは「一人も日の丸に対して同じ意見はなかったのに、議論なく法制化してしまう怖さを感じた。同時に、ヤマトにもいろんな人生があるのだと分かった。このシリーズで沖縄人の目で日本という国をもっと見たいという気持ちが生えた」と言う。

主催する高校教諭青木一博さん(四八)は「今もタブー視される日の丸。会場では、互いの思いを自由に交換したい」と話している。

十月三日まで。無料。問い合わせは同センター078・851・2780。

1999.9.25. 神戸新聞



キリスト教教育同盟 日韓歴史教科書直読み委員会 編

キリスト教教育同盟 日韓歴史教科書直読み委員会 編

日韓の歴史教育検証

中外日報
2000.5.30

国際プロジェクト 成果をまとめ出版

神戸市灘区山田町の御神戸学生青年センター（飛田雄一館長）は日韓の歴史教

育の参考書として、キリスト教学校教育同盟関西地区国際交流委員会編『日韓の歴史教科書を読み直す―新しい相互理解を求めて―』の写真を出版した。キリスト教学校教育同盟にとっ

て初めての国際プロジェクトとなった日韓のキリスト教歴史教育研究者による歴史教育の共同研究。その成果を記した論文十編が収録されている。日韓の友好関係を進める

キリスト教学校教育同盟

上で一つの「壁」となっているのが近現代史における歴史認識の違い。一九八二年に日本の文部省が教科書の検定にあたり「侵略」を「進出」に書き換えるように指示したとされる「教科書問題」は両国の歴史認識に大きな隔たりがあったことを浮き彫りにした。その後、日韓両国の研究者によ

り歴史認識や歴史教科書の研究が進められた。本書の研究会も九〇年にスタート。のちに日韓の学者や教師ら十人ずつで構成され、ソウルと京都で十回にわたり会合が開かれた。日韓の歴史の教科書と比較し、表記や事件に対する認識の違いを探っていった。関係者がキリスト教信仰を共有していたので交流や作業は比較的スムーズに進んだ。当初の構想では教科書の製作を目指していたが、参加した教師たちからの授業の手引きになる本が欲しいという要望から本書の刊行となった。

韓国の近代化と近代日本の問題、女子を労働に従事させるために組織した女子挺身隊と従軍慰安婦の関連性など解決していない課題も残ったが、両国の歴史認識を明らかにしたことで、今後の展望も浮き彫りになった。

特に藤岡信勝氏が提唱する「自由主義史観」について「千年以上にもわたる日本と韓国の人的・文化的交流をどのように評価するのか、また日韓のナショナリズムを超越する精神なり原理を見いだせるかどうか、自由主義史観を克服する大きな鍵となるだろう」と述べている。事実関係を正確に追究しながらも、国家的・民族的なエゴイズムに陥らない記述は、新しい相互関係を深めたいという両国の研究者の熱意を感じさせる。

A五判、二〇二六、本体価格二、一九〇円。問い合わせ・申し込みは同センター電話〇七八（八五二）二七六〇まで。

2000.5.30 中外日報



神戸学生青年センターが発行した30周年記念誌『20世紀から21世紀へ』

市民活動の拠点「神戸学生青年センター」

30周年で記念誌を発行

02.8.20
神戸

平和、人権、環境などをテーマとした市民活動の拠点となっている財団法人「神戸学生青年センター」（神戸市灘区山田町三）がこのほど、創立三十周年記念誌『20世紀から21世紀へ』を発行した。

同センターは「六甲キリスト教学生センター」を前身に始まり、一九七二年に現在の組織となった。会館に貸会議室や宿泊施設を備え、朝鮮史などのセミナー活動に力を入れてきた。

記念誌はA4判百九十二ページで、同センターの歩み、その間に開かれたセミナーの記録のほか、七七年から発行している「センターニュース」四十八号分の復刻版も掲載。またセンターとかわって来た三十六人が各分野から言葉を寄せた。飛田雄一館長は「記念誌編集の過程で、センターを中心としたいろいろなつながりを再確認できた。今後もそうありたい」と話している。定価は千円。同センター ☎078・851・2760

2002.8.20 神戸新聞

枯れ葉剤で障害 痛みに苦しむ

ユンさんを助けて

ベトナム戦争で米軍が散布した枯れ葉剤の影響とみられる障害で苦しみ、症状が悪化している少女がいる。ド・トゥイ・ユンさん(17)。その痛みを和らげるためには手術が必要だと、ジャーナリストや会社員、学生たちが支援の会を結成した。その中には募金や励ましの手紙などが寄せられ、支援の輪が広がっている。

【樋口岳大】



ユンさん(左上の写真)と出会い、学生らと支援する会を結成した村山さん(兵庫県尼崎市の写真展会場で昨年11月)

支援の会 手術へ募金活動

ユンさんは顔の右半分に腫瘍のようなものができており、右耳は聞こえず右目も見えない。父がベトナム戦争中に枯れ葉剤を浴びたのが原因とみられ、ベトナム政府が枯れ葉剤被害者と認定した。今もほおや頭部に激しい痛みを感じ、症状は重くなっているが、政府からの援助は日本円で月約600円。通院費だけでも月約1万3000円かかり、痛みを和らげるために必要な手術費の、少なくとも約50万円がねん出できない。

ユンさんへの支援は、フ

学生、社会人らとともに「ユンちゃんを支援する会」(事務局・大阪市)を結成した。昨年11月から本格的に活動を始め、街頭でのチラシ配りや、兵庫県尼崎市で写真展を開いてきた。これま

た大阪府高槻市の男性(68)は自身もがんと闘病中で、「ユンさんは、彼女には全く責任のない過去の戦争のせいで苦しんでいる。社会全体で助けられないといけない」と話す。

神戸で写真展

「ユンちゃんを支援する

写真展を開く。19日午後7時から村山さんの講演もある。無料。

会」(ホームページ＝<http://www.geocities.jp/shiensurukai.jp/>)は16(0)。募金は郵便振替(00770・0・56453)の神戸学生青年センター2、口座名義「ユンちゃんを支援する会」で。

ユンさんへの支援は、フ

争被害者の現状を伝える写

でに、大阪、兵庫、京都、香川、愛知などの約60人から約27万円の募金が集まった。

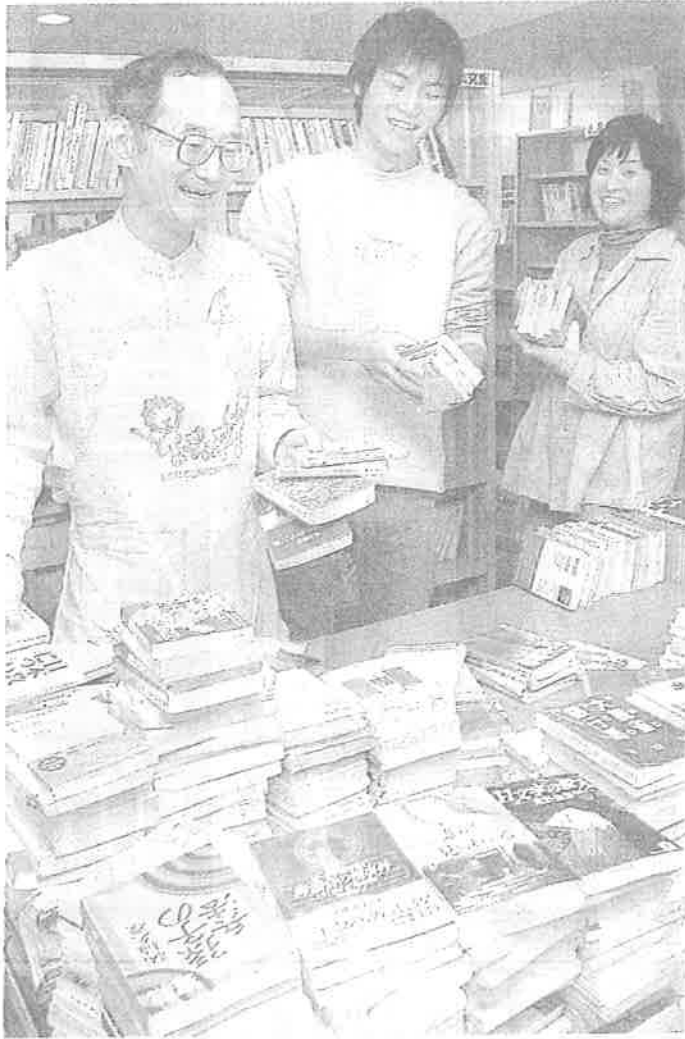
同会に参加している明石

オトジャーナリストの村山康文さん(37)＝大阪市＝が18日、同県明石市＝は18年、ベトナム南部を取材中に会ったのがきっかけで始まった。何度もユンさんのもとを訪れ、同行した

工業高専3年、永田花さん(18)＝同県明石市＝は「私も、ユンさんのような障害で学校に行けなかったらつらい。同年代としてできることをしたい」。募金をし

2006.1.14 (毎月新刊) (2刊)

頑張れアジアの留学生



古本市の準備を行う飛田雄一館長(左)ら
(神戸市灘区の神戸学生青年センターで)

支援の古本市10年目

外国人留学生らを支援する神戸学生青年センター(神戸市灘区)は15日から、県内で学ぶアジアの留学生を支援するための古本市を開く。1998年にスタートして今年で10年目。昨年までの売上金約1980万円は、33人の奨学金に充てられた。同センターは「これからも、一人でも多くの留学生の支援に役立てたい」と意気込んでいる。

15日から神戸学生青年センター

同センターは阪神大震災後、自宅が全、半壊した留学生らへの支援を全国に呼びかけ、集まった募金のうち約1300万円を基に、95年11月に留学生奨学金制度「六甲奨学金基金」を設立。しかし、年々募金が集まりにくくなり、基金に充当するため古本市を始めた。毎回3万〜8万冊が寄せられ、昨年までの9年間で計約50万冊が集まった。今年は今までに約1万2000冊の古本が届けられているといい、同センターで1冊100円か、300円で販売される。

初回の売り上げは、約150万円。絵本から専門書までがそろい、地元や愛好家らの人気を集めたこともあり、昨年は過去最高の約300万円を売り上げた。今年も360万円が目標という。

毎年4〜6人の留学生に一人あたり月5万円を1年間支給しており、飛田雄一館長は「奨学金を受けた学生の中には、恩を忘れずに手伝いに来る子もいる。皆さんの善意を寄せてほしい」と話している。

古本市は5月15日まで。期間中無休で午前9時から午後10時。同センターは、古本の受け付けを今月31日まで行っており、期間中のボランティアも募集している。問い合わせは同センター(078・851・2760)へ。

名簿が語る 強制連行



戦時朝鮮人強制労働調査資料集。朝鮮人の名簿や連行先が記載されている

浜松の地域史研究家発刊

太平洋戦争中に朝鮮半島から強制連行されて亡くなった朝鮮人の実態調査を進めている浜松市の地域史研究家、竹内康人さん(50)が、約1550カ所の連行先事業所と、亡くなった7750人の名前などを記載した「戦時朝鮮人強制労働調査資料集」を発刊した。20年以上かけ、行政資料や各地の市民団体の調査結果にあたり、関係者の証言を聞き取って一覧にした。これまで地域ごとに資料があったが、一つに集約されたのは初めてだ。

日本は、国家総動員法(38年制定)に基づく計画に沿って39〜45年に朝鮮人を雇用・徴用した。当初は「募集方式」で進めたが、42年からは監視つきの「官斡旋方式」、44年には徴用令に基づき「徴用」と変更。鉱山や工事現場、軍需工場へ連働かされた朝鮮人は70万人、うち数万人が亡くなったともいわれるが、正確な人数は分かっていない。竹内さんは83年ごろから強制連行について調査を始めた。

朝鮮人7750人、全国の資料集約

戦争末期の44年ごろに約2千人の朝鮮人が働いたとされる静岡県掛川市の中島飛行機の地下工場を手始めに、現場などを訪ねた。どこでだれが、いつ亡くなったのかなど基礎的なデータが不足していることを痛感し、資料集の作成を考えた。強制連行の事務を所管していた旧厚生省勤労局の「朝鮮人労務者に関する調査」や、旧陸軍の名簿などから連行先のデータを集めた。また、生き残った朝鮮の人々から聞き取りをした。把握できた約1550カ所の連行先は国内だけでなく、フィリピンやインドネシアなど旧植民地だった東南アジア諸国の連行先も含まれている。ほかに、強制かどうか

(宋光祐)

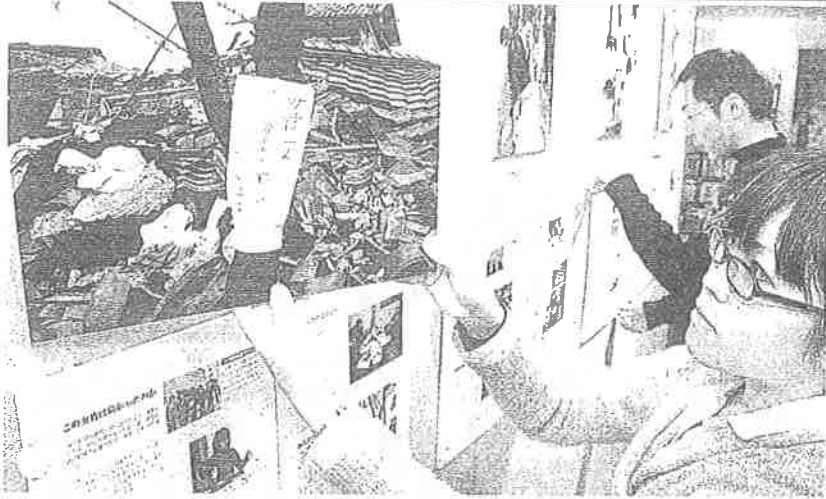
明らかではないが、朝鮮人の動員・就労が確認された場所やその可能性が高い場所計約1300カ所も記した。土木建設や港湾、軍需工場などの業種も明記。従軍慰安婦の慰安所も記した。名前が明らかになった7750人の名簿には本名と日本名、本籍地の住所、連行先の事業所名、死亡年月日、死亡年齢を記載。分かる限りで労災や病気、ガス爆発などの死因も載せた。発行元の神戸学生青年センターによると、在日朝鮮人らでつくる市民団体「朝鮮人強制連行真相調査団」などが各地で調査を続けてきたが、全国のデータをまとめた資料はなかったという。竹内さんは「被害を受

けた人の視点で歴史を見ることが、平和に向けた歴史認識の共有につながる。今後は、当事者の証言などデータベース化を進める必要がある」と話している。

資料集はB5判で234ページ、1575円。問い合わせは同センター(078・851・2760)へ。

今後の調査に貴重な資料だ

龍谷大の田中宏教授(日本アジア関係史)の話 戦後間もない時期の国の調査で詳細が明らかになっている中国人に比べて、朝鮮人の強制連行の実態は不明な点が多い。市民団体が各地で調査しているが、日本政府が本腰を入れておらず資料も断片的なものしかない。その中で、全国のデータを網羅的にまとめた資料集は、今後の調査にとって貴重なものになるだろう。



張り紙を撮影した写真。調査内容とともに展示される「神戸学生青年センター」

全国の中高生や大学生らが、阪神・淡路大震災の報道写真が撮られた当時の状況を調べた「震災写真調べ学習プロジェクト」のパネル展が20、23日、神戸市灘区山田町3の神戸学生青年センターである。撮影した

カメラマンや被写体となった被災者らを探して聞き取りする中で、被害の実態や、15年という歳月の重みを学んだ。
(石崎勝伸、岩崎早志)

震災写真高校生らが追跡

きょうからパネル展

はそのままになったの性一人を助けたが、中に「助かったのか」をいる女性の母親は「うれしかった」と思っていたといにはほまれ、捜索を断念した。

神戸 一昨年、Nサ-住田功(さん)50が呼び掛け、6校1団体の生徒ら約50人が、住田さんの著書「阪神大震災ノ-ト」語り継ぎたい。命の尊さ」に載った写真20枚を調査した。

つくば開成高校京都校(京都市)の生徒10人が着目したのは、神戸新聞カメラマンが地震発生当日に芦屋市で撮った1枚。「女性一人 家屋の下にいます」。手書きの張り紙が木にくくりつけられていた。「なぜ女性

撮影者探し被災者に取材

昨年1月、当時のカメラマンと一棟に現場を訪ねた。街並みはすっかり変わっていたが、住民に尋ねると、隣家が倒壊し、大けがをした女性に会い、当時世話を考えた」と話した。

「被害の実態、人のつながり実感」



調査したつくば開成高校京都校の生徒と教師。震災15年の関連行事にも参加した「神戸市中央区三宮町3」

午前9時〜午後10時半 3月には神戸市中央図書館(最終日のみ午後7時)まで、同センターも07来センターでも展示される予定。
8・8051・2760。

被災留学生に100万円

毎日
2011.4.7

「古本市」で支援金を寄贈

神戸学生青年
センター

東日本 大震災

東日本大震災で被災した留学生らを支援するため、神戸学生青年センター（神戸市灘区山田町3）は、現在同センターで開催中の「古本市」の売り上げから100万円を寄付する。同センターは、阪神大震災の時、全国から集まった支援金で、被災留学生らに生活一時金を支給してきた経験がある。飛田雄一館長（60）は、「古本を売ることで、



売上げ金の一部が被災地に贈られることになった古本市
神戸市灘区山田町3で

被災地の留学生らを支援して」と呼びかけている。

同センターは、平和や人権、環境、アジアをキーワードに活動し

ている市民団体。95年の阪神大震災の時は、全国に募金を呼びかけ、4242万円が集まった。県内に住む767人の留学生らに一時金として、3万円ずつ支給。その残金で同年、「六甲奨学金」を発足させた。

基金では、毎年5人程度の留学生らに、月5万円の奨学金を支給してきた。98年から毎年開かれていた「古本市」の売り上げは、奨学金を支給するための柱となっていた。昨年は、過去最高の約414万円を売り上げた。

東日本大震災は、古本市が始まる4日前に起きた。「手をこまねいているわけにはいかない」との思いから、100万円を10日ごろに「移住労働者と連

帯する全国ネットワーク」（東京都）を通じて、被災地に送ることにした。飛田館長は「被災地の留学生らは不安と困難を抱えているはず。少しでも役に立ててほしい」と話す。

古本市は5月15日まで。期間中無休。販売価格は、文庫・新書・児童書・マンガなどが100円で、一般単行本は300円。問い合わせは同センター（078・851・2760）。

【後藤豪】

戦死者の墓碑の多くは上部が四角すいの形をしているという。近頃の墓地を調べることで、生徒に戦争の実態や平和について学んでもらう独自の教育に取り組んだ元教諭の宮内陽子さん(61)が、その成果をまとめたブックレット「生徒と学ぶ戦争と平和」を出版した。宮内さんは「若い人に読んでほしい」と話している。

(大月美佳)

墓で知る戦争の傷痕

「ふ会」代表として日本軍の中国侵略の現場を訪れている。「戦争体験者が少なくなる。『被害』を通して『加害』も学び、語り部を育てたい」と話している。

ブックレットは同校の紀要「愛徳教育」の30、32号(09、11年)に発表された内容を抜粋。祖父の戦争体験の聞き書きの報告も含まれている。

A4判、78頁、300部発行。560円(送料80円)。神戸学生青年センター ☎078・851・2760

同じ年の兵もいた。心が苦しくなった

宮内さんは愛徳学園中・高校(垂水区)に1982年から勤務。「身近な墓から戦争犠牲者の多さに気付いてほしい」と、2000年から墓碑調査を授業に取り入れた。中学2年生の夏休みの宿題で近所の墓地から四角すいの墓を探し、そこに刻まれた死亡時期、場所や死亡状況、享年を記録するように指示。結果や感想をまとめて意見交換し、高校生になって再度、感想を聞くなして理解を深めた。

2000〜07年に調べた戦死者の墓は473人分。うち享年は10代が9人、20代が371人、30代が80人だった。死亡場所は中国が130人と最

愛徳学園中・高 生徒と調査、冊子に



「生徒とともに私自身が一番学んだ」と話す宮内陽子さん(神戸区山田町3)





編集・発行 (財) 神戸学生青年センター
2012年9月8日
〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1
TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878
<http://ksyc.jp/> info@ksyc.jp